

第81回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十二年七月八日（土）
場所 千代田校舎五〇五教室

講演

教養の形について

共立女子大学学長 阿部 謹也 先生

研究発表

《国文学》

『病牀六尺』第一回の構造

東京都昭島市立清泉中学校 乙幡 英剛

子規の随筆は従来「思いついたことを書き止める形式」（梶本剛氏）とされ、特に『病牀六尺』（明治三十五年）においては、その取り上げる対象に対して「互いに何の脈絡もないという感じがするほど多種多様」（栗津則雄氏）とされてきた面がある。しかし『病牀六尺』第一回の内容を見ていくと、そこには子規の

①新聞『日本』に執筆（口述）・掲載にあたって取り上げる対象（情報）に動機・内容・時期に関しての取捨選択が意識的に行われてお

り、

②『日本』というメディアを通して自らの思考や容体を含め読者に多様な情報を提示し、啓蒙していく、

という方向性が伺えるのである。それこそが病床にありながらも『日本』の記者であり続けようとした子規の社会への参加の形態であり、同時に「今日ノ生命」（小島一雄宛ての書簡）を実感する証しであった。

本発表においては、①第一回の構成の分析②当時の社会背景及び子規の情報源の確認③前半部「前置き」と後半部「水産補習学校」のエピソードの関連性について考察を試みる。

中原中也『山羊の歌』論

——「少年時」詩章の特質——

博士前期課程 二年 早川 友規

九篇から成る「少年時」詩章の各詩について解説し、詩章を貫くモチーフと各詩の有機的結合の有様を究明していく。

吉田熙生は『中原中也必携』（昭和五十六年三月三二日）で、「少年時」から「寒い夜の自我像」へという詩人の自覚を強調す

る軸と、「盲目の秋」から「木陰」「夏」に至る絶望、喪失、悔恨の軸とが交錯しながらこのパートを構成している。

としているが果してそう言い切れるのであろうか。また、二つの構成意図が「交錯しながら」存在するという場合それは明確な構成意図を究明できたといえるのであろうか。

加えて、この詩章に収められた詩の制作時期はちょうど長谷川泰子と別れの時期と重なるが、「少年時」という詩章名をあてた意図はいったい何であったのだろうか。

以上二点（「少年時」詩章の構成と章名に関して）について発表する。

《中国学》

中国近代における国家の認識

——『春秋公羊伝』はなぜ近代に蘇ったのか——

東洋大学非常勤講師 中村 聡

変法時期における近代の課題は、それ以前の改革項目を不可分の関係をもつトータル改革計画の一部と見做し、「全変」を行うことにあった。「全変」を行うためには、変革の原理それ自体を変革する必要があった。その変革の原理自体を変革することにこそ、変法派の独自性があったのである。

秦が中央集権統一国家を築いて以後、中国には国家という概念がなくなってしまった。そこにあるのは、中華という東アジアに独自

に展開した国際関係だけであった。しかし、一九世紀の地球的規模の国際社会中にあっては、中華という東アジアにのみ通用する国際関係は、もはや用を足さなくなってしまうたのである。各国が主権を持った対等の国として併存する国際社会の中で中国を存続させるためには、中華という世界観を捨てて、列国並立の単位とならざるをえない。近代中国の産みの苦しみは、すぐれてこの点にあった。国家とは何なのか。どのような国として生まれ変わるのか。近代の中国人には経験のない変化であった。その思考の拠り所は『春秋』に求められた。ここに『春秋公羊伝』の思想が日の目を見るのである。